

## 2010 東アジア・バレーボール科学会議に参加して

柳澤優樹（大東文化大学大学院）

2010年8月23日～24日にかけて、「2010 東アジア・バレーボール科学会議」が台湾の国立東華大学（花蓮市）で開催されました。日本からは遠藤会長を団長とする14名が参加しました。日本バレーボール学会設立15周年を記念して行われた第一回目の国際交流に、日本バレーボール学会会長の遠藤先生のご厚意により、学生の身で参加させていただき、さらに学生生活初の学会発表の経験をするなど大変貴重な体験となりました。遠藤先生並びに同行された諸先生方、ならびに通訳をして下さった筑波大学の童さん、また、台湾にはバレーボールを専門とする学術団体がなくともかかわらず、国立東華大の林如瀚教授をはじめ我々の受け入れにご尽力いただいた各先生方、ならびに盛大なレセプションを開いてくださった関係者の皆様に心から厚く御礼申し上げます。

本会議は主に、キーノートレクチャー、ポスター発表、口頭発表の3部門から構成されていました。

24日午前のキーノートレクチャーでは、東華大のスポーツ医学：楊昌斌教授による「The Influence of Different Exercise Models Intervention on the Healing of Rats' Achilles Tendon」の講演を拝聴しました。運動様式の違いによるアキレス腱障害の回復について、ラットの筋組織の写真を提示しながらの興味深い内容に質疑応答も盛り上がり、充実した講演となりました。



ポスター発表におけるディスカッション（中央筆者）

ポスター発表では我々日本バレーボール学会の参加者による10題のポスター発表が行われ、多くの方々とディスカッションをすることができました。英語での発表が基本となりましたが、質疑応答では通訳をして下さった童さんのおかげで日本語と中国語でのやり取りを通して様々な

意見を交換しました。どの分野の研究発表にも多くの関心が向けられていました。台湾からの参加者の中には社会人大学院生が多く、特に現地の小学校教諭の方々とやり取りは非常に貴重な経験となりました。私自身教員を目指すものとして、他国の教育現場の声を聞けるとは思っていなかったので興奮しました。第二外国語で中国語を履修していた私にとって、時には口頭で、時には漢字での筆談を交えながらのコミュニケーションを通して、多少ではあります。片言の中国語が理解してもらえた事は感激でした。

口頭発表では、東華大の社会人大学院生の修論発表会を中心に口頭による研究発表が行われました。台湾の大学院生によるスポーツ科学の研究も参考にして、今後の活動につなげたいと思いました。修論については22題の発表があり、スポーツ心理学2本、体育経営学3本、スポーツ政策1本、体育方法学9本（うち2本がバレーボール）、特殊教育1本、体育科教育学1本、スポーツ人類学1本、健康体力学3本、スポーツ栄養学1本と、多種多様な研究に取り組んでいるようでした。

今回の台湾訪問を通して、体育・スポーツの分野、特にバレーボールに関する先生方、先輩方と素晴らしい時間を共有し、意見交換できたことは大変貴重な体験であり、有り難いことです。観光以外で海外に出向いたのは修学旅行以来で、多少の不安はありましたがとても新鮮な気持ちで過ごすことができました。今後修士論文を執筆していくにあたり、もっと広い視野で先行研究を分析し、積極的にアウトプットしていくと同時に、多くの研究者の方々から良いところを学んでいこうと思います。スポーツにおいても研究においても、良い手本を自分で選んで盗み取るくらいの気持ちで実践しないと、自分だけのプレー、自分だけの研究は見いだせないと感じました。

私の専攻するスポーツ心理学の諸理論は、スポーツの現場はもちろんのこと教育の現場でも広く応用されています。台湾の先生方も非常に興味を持たれていましたし、現場で活用するべく熱心に研究されていました。「研究をいかに現場で応用するか」は共通の課題であり、今後の研究において注意すべき点であると思います。今回の経験を活かし、少しでも社会の役に立つ研究を残したいと思います。

最後に、改めてこのような貴重な機会を与えて下さった関係者の方々に感謝申し上げたいと思います。日本バレーボール学会の発展と国際交流事業の成功を心から願うものであります。